

## 牧口常三郎『人生地理学』とトポスの問題

中 島 岳 志

### はじめに

こんにちは。中島です。今日はお招き頂きまして、本当にありがとうございます。「牧口常三郎『人生地理学』とトポスの問題」というタイトルでお話をさせて頂きたいと思います。

皆さんと同じように、私も10代の後半から20代前半というのは、色んなことに悩んだりしました。私は大学に入って1年目でいきなり留年をしたんですね。だから大学に5年間行きました。1年目大学に入って、もう5月に大学の授業がつまんないなと思って授業に行かなくなっちゃった。それでぐだぐだとしていました。私が大学に入ったのが1994年という年で、そして、もう一回1年生をやらなきゃいけないというのが確定した1995年という年に、阪神淡路大震災やオウム真理教の地下鉄サリン事件があったりしました。

当時、私は20歳になったばかりだったんですけども、そんな時に、色んな問題を考えました。ずっと戦後日本が抱きしめてきたような高度経済成長とか、あるいは、コンクリートで固められた都市社会というのが、脆くも崩れさった。こんなコンクリートの世界、あるいは、経済発展の物語を抱きしめて僕は生きていっていいのかな。本当に良い大学を出たら、良い会社に勤めて、そして、良い就職先があって、安泰した人生なんて本当に送れるのかな。そんな物語の方が空虚じゃないかな。そんなことを考えたりしたのが当時でした。

そんな中、震災の後、3日後ぐらいだったと思うんですけども、テレビを見ていたら、長田という町が映りました。長田は当時丸焼けになってしまったんですけども、規制線が解除されて、自分の家があった所に戻っている人たちが映っていました。その中に、ある70歳位のおばあさんが映っていました。で、おばあさん、一生懸命、自分の家のあった所の瓦礫をかき分けて探している。テレビのアナウンサーは、このおばあさんに近寄って行って、聞いたんですね。「ここがご自宅だったんですか」と。おばあさん、一番最初はテレビカメラがいる事も気付かなくて、自分の家のあった所の瓦礫を一心不乱に探していたので、最初、テレビのカメラが来ていたことに驚いていました。「来てたの？」という感じのびっくりした顔をしました。しかしア

---

Takeshi Nakajima (北海道大学大学院公共政策大学院准教授)

\* 本稿は、創価教育研究所記念講演会での同タイトルの講演(2012年11月26日)に加筆修正をほどこしたものである。

ナウンサーが「何をお探しですか」と聞いた時、おばあさん、もう一回驚いた顔をしました。けど、この驚いた顔は最初のびっくりした顔とは違う驚いた顔でした。少し怪訝で戸惑ったような、そして、何を当たり前の事を聞くんだというような、ちょっと少しばかり怒りが入ったような、そんな表情をしました。そして、あまりにも当たり前のことでしょうというふうに、「位牌です」と言いました。仏壇にある位牌ですね。

20歳の当時の私は、これに、ものすごく大きな衝撃を受けました。なんで衝撃を受けたかという、私はその瞬間あるものと出会ったんですね。何と出会ったかという、私の中の空白と出会ったんです。このおばあさんは、地震で自分がずーっと大切にしてきた自宅が崩れ去った後でも、自分の精神の根拠がある訳です。もう少し踏み込んでいうならば、宗教という問題です。信仰という問題ですね。そこに自分の生きる一つの価値や指針、あるいは、精神的に依拠するものが非常に強くある。だから、真っ先に位牌を探す、仏壇の場所を探すという行為が彼女にとっては当たり前のことでした。

私は両親が団塊の世代です。大阪の真ん中のマンションで、核家族で育ちました。だから、家には仏壇も何にもありませんでした。阪神大震災の時、家は幸いにして倒壊まではしなかったんですが、家の中がぐちゃぐちゃになりました。その時に自分が真っ先に探す物の優先順位が自分の中ではっきりしているかという、そんな事はありませんでした。せいぜいおそらく思い出のものとか、アルバムとかでしょうね。

しかし、おばあさんにとっては、当たり前の事のように、この精神的な核になるものがある。この差はいったいなんなんだろう。僕たちは、戦後日本というのは（この年はちょうど戦後50年という年でしたけれども）経済発展とかコンクリートをずっと抱きしめて生きてきました。その中で、失ってしまったものをそのおばあさんが見せてくれたんだろうと思いました。僕がこれから生きていくためのそのアイデンティティーの核となるものはいったいなんなんだろう。この問いに20歳になったばかりの私は出会って、そこで悩んで、そして初めて、勉強してみようと思いました。学問というものに触れてみようと思った。それから、色んな本を読み始めて、特に、人間のアイデンティティーについての宗教、あるいは、ナショナリズムとか、信仰とか、愛国の問題を自分のテーマにしていきました。

しかし、その直後に起こったのは、地下鉄サリン事件という事件でした。オウム真理教。今年(2012年)になって、色んな人が逮捕されましたね。皆さんはお生まれになってそんなに時が経っていない頃だから、鮮明な記憶はないかもしれませんが。この事件が起きた時、世の中はどうなったかという、宗教はやばいって話になったんですね。宗教にはまっっていく若者、これは危ないんだという話に世の中は一色になっていきました。

私はまたこの流れにも非常に大きな違和感がありました。もちろん、はじめにオウム真理教に対して、非常に大きな違和感がありました。なんであんな形で人を殺してしまうのか。なんでそんな手口に至ったのかということに対して、私は強烈的な批判と大きな違和感がありましたが、しかし、オウム真理教に入っていった若者たちのある問いというのだけは私は分かる気がしたんで

すね。

井上という死刑囚になった人がいます。この井上が入信前に尾崎豊の歌詞に似た詩を書いています。

「時間に追いかけて／歩き回る一日が終わると／すぐ、次の朝／日の出とともに／逃げ出せない、人の渦がやってくる／救われないぜ／これがおれたちの明日ならば／逃げ出したいぜ／このきたない人波の群れから／夜行列車に乗って」

満員電車に乗って仕事に行って、そして、また満員電車に揺られて帰る。そんな毎日の繰り返しが、自分のこの生きている生命にとってどういう意味があるのかがよく分かんない。そんな問いにぶつかった時に、彼の目の前に現れたのが、オウム真理教という宗教でした。ここの入り口の所、彼の問いだけは、僕はわかると思ったんです。

今からお話したいのは、そういうような私が生きているとは何なのか、私という存在とはなんなのか、という問題と、トポスという場所の問題、これを牧口常三郎という人はどういうふうに切り結んで世界の構造を考えようとしたのか、というお話です。

そして、これは私自身にとって、皆さんぐらいの年齢の時に、ものすごく大きな課題でした。私はその後、学者になる道を選びました。なんでそんなわざわざ面倒くさい学者なんかになったのかというと、私にとって今お話ししたような問いを、とにかく、自分の中で理解して解決したい、という思いが真っ先にあったからです。大学の先生になりたいと思った事は、いまだに一度もありません。私は何か私が立てた問いというのをとにかく一個一個片付けていかないと前に進めないって思ったんです、だから色々な本を読んだりしました。その結果、たまたま大学に今赴任をして仕事をしているんですが、まだその問いはずうっと続いています。そして、まだまだ私自身もわからないことは確かにたくさんあります。

その途上の話ですけれども、今日はそんな問題を巡って話をさせていただければと思っています。おそらく皆さんにとっても、通俗の言葉でいう自分探しという問題があると思います。就活の時に、皆さんも強くぶつかる問題だと思います。本当に自分のやりたい事ってなんなのか。自分が本当に向いているものってなんなのか。自分が必要とされる場所ってどこにあるのか。そういういった問題に直面している人も多いでしょう。私の学生も就活で何回も何回も面接で落とされて、自分が生きていることの意味とか、自分の果たすべき役割みたいなを見失っていて、非常に精神的に苦しい思いをしています。みんな20代の前半にぶつかる、この私とはなんなのか、私が世界において生きている意味とはなんなのかという問題を少しずつ掘り下げながら、そして、牧口常三郎の力を借りながら、トポスという問題に最終的には切り込んでいきたいと思っています。

さあ、ここからお話を始めようと思うんですが、少し助走をしていきたいと思っています。少しずつ問題に近付いていきたいと思っています。

## 西洋における「私」——（その1）プラトン

本来は、半年くらいかけてする話をここから20分位でしようと思います

3人の人物にここで登場してもらおうと思いますけれども、まず一人目が、西洋の思想を考える時に非常に重要なプラトンです。ものすごく短縮して話しますね、エッセンスだけ話します。プラトンという人は、「アイデア」という概念を重視した人物でした。このアイデアとはいったいなんなのか、というのが最初に重要な問題になってきます。徐々に説明していきましょう。

ある図形を書きますね。（と、黒板にフリーハンドで三角形を書く）ここに一つの図形を書きました。さあ、この図形はいったいなんでしょう。皆さん、ばかにするなという顔をしていますね。俺たち私たちは大学生だぞと思っているかもしれませんが。ちなみにこの図形はなんですか。（学生「三角形です。」）三角形ですよ。

しかし、もう少し掘り下げて考えてみましょう。これは本当に三角形でしょうか。まず小学校に戻って考えてみましょう。皆さん、小学校で三角形の定義をどう習いましたか。多分こう習ったはずですよ。三つの線分に囲まれた内角の和が180度の図形。これが三角形ですよ。三つの角度を分度器で測って、足したら180度になる、これが三角形ですよって先生に習ったはずですよ。そう習いましたよね。これが三角形の定義です。

では、もう一回聞きます。この黒板に書かれた図形は、本当に三角形ですか。私の言いたい事がちょっとずつわかってきたかもしれません。これ、本当に三角形ですか。違いますよね。違うんです、厳密に言うと。

なぜなら、私これフリーハンドで書きました。適当にシャッシャッシャッって書きました。分度器を持ってきて、これを測ってみると、本当に厳密に、180.00000度になっているかということにならないんです。私の書いた図形はいいかげんです。だからこれは厳密には三角形になっていません。私が引いた線って直線でしょうか。違いますよね。ガタガタガタガタしています。皆さんの所から見ても、これが直線でないということがわかると思います。

もっと踏み込んでみましょう。皆さんは直線を見る事が出来ますか。本当の直線を見た事がありますか。ないんです。見れないんです。だってそうですよ。厳密にミクロのレベルで、そして、顕微鏡を使って見るならば、どんな直線もインクの太さがある時点において、それは直線になっていないからです。顕微鏡で見たら、ガタガタしているはずですよ。だから、僕たちは本当の直線を見た事はありません。本当の三角形を見た事もあります。とするならば、この図形はなんですかというふうに言われると、正確には、三角形のように見える図形としか言いようがないんですよ。実際は本当の三角形なんて見れないし書けないんです。だって内角の和は180度にはならないし、直線も書けません。どうしたって三角形もどきです。

プラトンはここからどう考えたか。本当の三角形は黒板にあるか、それとも、内角の和が180度の三つの直線に囲まれた図形という定義にあるか、どちらに本当の三角形はありますか。定義の方ですよ。プラトンはそう考えたんです。私たちが見たり、触ったりしているこの現象世界と

いうものは、とてもあやふやなものです。

これ（机を指しながら）も私たちは、これは何ですかって聞かれたら、机ですというふうに答えるでしょう。けれど、これも正確じゃないですよ。だって、ここに空手部の人がいたらですよ、思いっきり叩いてもらうと、その瞬間真二つに割れてしまうかもしれません。そうするとこれはもう、廢材になってしまう訳ですね。そうするならば、これはもはや机とは言えず、机のように見えるものといかない方がいいですね。それくらい私たちが触ったり見たりすることの出来る世界というものは、あやふやなものです。

本当の世界というのは、どうも、見たり触ったりすることのできない、ある種の観念や定義の中にあるというふうにプラトンは考えました。この今申し上げた定義のようなものの集まり、集合体のことを「アイデア」と呼びました。

このアイデアは、ある種の超越的なものというふうに考えてもいいかもしれません。先ほどは三角形の定義、三角形のアイデアの話をしたから、皆さんはこのアイデアを掴みやすかったかもしれません。しかし、これをもう少し抽象度を高めていくと、一気にアイデアは難しくなっていきます。例えば、本当の幸福ってなんですかと聞かれて、どう答えますか。幸福の定義ってなんですか。難しいでしょ。私だって答えられないです。自由ってなんですか。真の平等ってなんですか。真理とはなんですか。そして、私とはなんですか。私の存在とはいったいなんですか。こういう問いに対して、このアイデアというのは非常に、難しい問題になっています。三角形のように簡単に答えられませんね。

プラトンは、このアイデアに人間がどんどんと近付いていくことを重要な理想と考えました。そして、アイデアをたくさん獲得した人間のことを彼は「哲人」と言いました。政治学にとって重要なのは、ここからですね、このアイデアの世界に接近した、アイデアをたくさん獲得した、哲人と言われる人たちがそが人民の統治をやるべきだという、「哲人統治」という観念が、プラトンの中からは生まれてくることになります。

皆さんに、まず念頭においてほしいのは、プラトンにとって、我とはなんぞやという問題の解になるようなものは、超越的なアイデアに存在する。そして、その考えがヨーロッパの思想で非常に重要な、底流のような所に流れているというのをまず頭に入れてください。これがプラトンの観念です。

## 西洋における「私」——（その2）デカルト

2人目にご登場して頂くのは、デカルトという人です。デカルトは、ある非常に有名な言葉を残したことで知られている人です。デカルトが残した有名な言葉、知っている人いますか。（学生「我おもう故に我あり」）そうですね。「我おもう故に我あり」と言ったのがこのデカルトという人でした。

デカルトはこういうことを考えました。デカルトはあらゆる現象を疑っていきました。

例えば、皆さんは今、私の話を聞いていますよね。聞いているはずですよね。

しかし、それは本当ですか。絶対に間違いのないことでしょうか。もしかすると次パッと目が覚めると、家のベッドで寝ているかもしれないですね。これ、夢かもしれません。夢でないと思いたいですけれども、夢かもしれません。わかんないんです。ここに自分がいて、何か今ここで授業に参加しているというのは、もしかすると、自分の中で完結した夢なのかもしれません。本当に私がここにいるかということの絶対的確証はありません。

デカルトはこういうことを、あらゆる形で疑っていきました。私は本当にここにいるのだろうか。隣に友達がいるように見えるけれども、友達は本当にここにいるのだろうか。もしかしたら、幻じゃないか。夢じゃないか。というふうに疑いました。疑い始めるとあらゆるものが疑わしくなってくる訳です。

あらゆるものを疑って疑って疑って疑って疑って疑って疑った末に、デカルトは、ひとつだけ疑えないことがあるというふうに考えました。何かというと、今私が疑っているということだ。つまり今自分は何かを考えている、というこの思考だけは疑えないというふうにデカルトは考えたのです。

自分は何かを疑っている。これを疑うことはできない。デカルトはここから出発するんです。私がここにいるという、その私の存在を証明出来るのは、私が思っているということにある。私は間違いなく思っているがゆえに、私が存在すると言えるだろうと考えました。私は本当にいるのか、ということの答えは、私が思っていることが確実である限り、私がここにいると言えるんじゃないか。こうデカルトは考えました。「我おもう故に我あり」の一番重要なポイントは「おもう」というところです。この「おもう」という、原語（ラテン語）で言うと「コギト」と言いますけれども、この「おもう」というところから、我があるという存在を規定できると考えたところから、近代というものがスタートすることになります。

ちなみに、デカルトは神という概念を捨てませんでした。なんで、「おもう」という現象が存在するのかと考えた時に、それは、超越的な神のようなものがあるからだ、というふうに彼は考えました。

しかし、デカルト以降の哲学は、「我おもう故に我あり」からスタートしていくことになります。つまり、「おもう」という現象によって自己の存在を規定できる。この「おもう」というのは、いわゆる理性です。この理性というものをベースとして人間存在を考え、理性に依拠すれば世界は「合理的」に秩序立つと考えたのが、近代のスタート地点でした。これが、西洋近代における合理主義というものを生み出していきます。つまり、神をどっかに追いやってでも、私がここで思っているという現象があれば、私を規定することが出来る、私の存在を証明することが出来ると考えたのが、デカルト本人の意図ではなかったのですけれども、デカルト以降の近代を作っていくことになっていきました。私とは何ぞやというふうに考えた時に、私とは理性というも

のを持った存在である。と考えたのが近代です。ここからは、合理主義の考え方が生まれていくことになっていきました。

### 西洋における「私」——（その3）デリダ

さて、これをまた大きく疑った人物が出てくることになります。さあ、また時代は変わります。20世紀の話です。最近の話です。デリダという人がいます。この人は、いわゆるポストモダニズムの重要な柱になる思想家としてよく取り上げられます。デリダは脱構築という観念を考えていきます。ディコンストラクションという概念ですね。

デリダはどう考えたのか。私の目の前に机があります。デリダはこれを机と呼ぶことは、この机に対する暴力なんじゃないのか。て、考えたんですね。どういうことでしょうか。

皆さんの中に、ちょっとばかり行儀の悪い人がいたとしましょう。その人が机の上に座ってしまったとしましょう。そしたらどうでしょうか。皆さんが机と呼んできたものは、その瞬間に椅子になるかもしれないですね。今日はちょっとあいにく雨が降っていますし、この机はどうも固定式なので、不可能かもしれませんが、このネジを外して校庭に持って行って、天気がいい日なんかはここに座って、お弁当なんかを食べたりするならば、これは一瞬にしてベンチになります。あるいは、この幅だと難しいと思いますが、二つくらいくっつけて、上に布団を敷いちゃえば、場合によっては、ベッドになるかもしれません。あるいは、いま、イスラエル情勢は緊迫していますけれども、ガザ地区の野戦病院に持っていけば、これはあつという間に手術台になるかもしれません。

というように、ここにあるこの物体は、様々な用途があり、様々な可能性を秘めているものです。これは環境が変われば、様々なものになり、ものとしての可能性が広がっていきます。なのに、なぜ私たちはこれを「机」と呼んでいるのか。これを机と呼ぶことによって、この物体が持っている多様な可能性を、もしかしたら、机という用途に矮小化しようとしているのではないのか。デリダはこう考えました。

「名付けるということは、暴力である」とデリダは考えます。名付けというものの背景には暴力が潜んでいる。なぜならば、もう一度言いますが、この机と呼んでいる物は、環境を変えれば様々な用途、様々な可能性を持っている物です。この物を、我々は言語によって規定していますが、実は本質的には環境によって規定され、存在しています。これを外に持っていけば、ベンチになりますし、戦場に持っていけば野戦病院の手術台になります。この物を規定しているのは、環境とその物との関係性です。なのに、私たちはこれを机と呼ぶ。言葉によって名付けるというのは、きわめて暴力的なことである。そうデリダは考えました。今、机だったからそんなに問題が起きませんでした。これを皆さん自身に置き変えてみましょう。

皆さんは、例えば、創価大学の学生さんですよ。 「私は創価大学の学生です」と言った瞬間、

もしかすると皆さんの中にあるものすごく多くの可能性を、「創価大学の学生」と言うことで矮小化する行為になるかもしれません。ですよね。もしかしたら、皆さん、ピアノの前に立てば、ものすごいピアニストかもしれません。バイオリンを持たせたら、天下一品の音色を出すかもしれません。あるいは、何か小説を書けば、ものすごい名文を書く、そんな能力を秘めているかもしれません。もしかしたら、ピアニストかもしれない。もしかしたら、作家かもしれない。そんな皆さんを創価大学の学生だというところに矮小化してしまうことは、皆さん自身が持っている多様な可能性を一元化してしまう暴力になるんじゃないか。私は日本人であるとか、私はなにになにであるというふうに名付けられたもの、そこには、様々なものを矮小化する暴力が潜んでいるんじゃないか。

だから言う訳です。そんなものは脱構築しよう。引き剥がしてしまえ。名前を引き剥がせという訳ですね。そして、みんな、どこにも着地しない、宙づり状態を引き受けて生きろ。こんなことをデリタは考えました。だから、彼は近代の合理主義を疑ったんですね。合理の合理性を疑った。本当に合理とか理性と言っているものは、確実なものなのか。それだって不安定で空虚なものなんじゃないか。理性と名付けられたものがあるにすぎないんじゃないのか。そんなものは脱構築する。そして、浮遊する中、どこにも着地せず生きていけ。

例えばドゥルーズという思想家は、ノマドという観念を重視しました。今ノマドってちょっと流行ってますよね。どこかのオフィスに縛られるんじゃなくて、いろんなカフェなどを転々としていくビジネスマンのスタイルをノマドと言ったりしますけれども、そういうような、あるひとつの枠組みに規定されることから、人々を解放していく。これを脱構築というふうに言いました。

ものすごい駆け足で、おおざっぱに西洋思想史を見てみましたけれども、私は、この3つのあげた中で、どれにも、納得できなかったんですね。

ポストモダンって結構格好いいでしょう。なかなか面白いなと思いました。けど、本当に皆さん、宙づり状態で生きられますか。名付けられたアイデンティティを全て剥がしきった上で、どこにも着地せずに生きることが、人間はできるんでしょうか。多分私は無理だと思いました。ポストモダンには圧倒的な無理があると私は思いました。

人間はやっぱり言葉の動物で、言葉に名付けられたものの中で自分を引き受け、そして、家族とか地域社会とか色んな重層的な関係性を引き受けながら、そこに自分を意味づけて生きていく存在です。それがおそらく人間の本質なんだろうと思います。そうした時に、ポストモダンは格好いいけど、無理だと思いました。近代にもやっぱり限界がある。すべて理性によってパーフェクトな社会をつくる事が出来るという観念に、私は大きな疑問を抱きました。どこかで人間は完成し、そして、完成した人間が理想郷を作り、そのユートピアの中でみんなが生きていけば、みんなが幸せになる。嘘だと思いました。

だって人間は、過去も現在も未来においても完成不可能な動物だからです。どんなにいい人だって、どんなにとっても心のきれいな人だって、私たちの中には悪と言うものがビルトインされ

ている。どうやったって、人のことを妬んだり、やっかんだり、あるいは、エゴイズムが出てしまったり、それが、人間の恐らく普遍的なあり方です。しかも、人間は永遠の存在ではありません。有限の存在です。なぜならば、私がひとつだけ皆さんに確実なことを言えるのは、ここにいる皆さんは、そして、私もですけれども、必ず死ぬということです。みんな残念ながら、死にます。いずれ死にます。死という観念を人間は手に入れてしまいました。人間は自分の生命、そして、あらゆる生命が有限の存在であるということを知ってしまった動物です。この有限という観念を手にした瞬間、人間が手にしたかというとその対概念である無限という観念を同時に手に入れることになりました。

人間はその無限を「神」と呼んだり、「仏」と呼んだり色んな名づけをしてきましたけれども、わたしたちは、死という観念を手に入れた瞬間に、本質的に宗教的な動物として立ち現われています。これは人間にとって避けられないものです。人間は必然的に宗教的存在です。あらゆるものを、神を含め脱構築して生きよというのは、私は不可能だろうと思いました。

### 仏教における「私」——「我なし、ゆえに我あり」

その時に、私の目の前に現れてきたのが、仏教の思想でした。

仏教は、とってもしつこいことを考えました。何千年も前によくこんなことを考えたなと思いました。私は仏教思想に出会った時に、自分探してみたいなものから解放されました。仏教はどう考えたかという、デカルト風に言うならば、「我なし故に我あり」と考えたんですね。これが仏教のある非常に重要なエッセンスです。「我なし故に我あり」。仏教はスタート地点で、ポストモダニストと同じところに立ちます。私の本質なんて存在しない、というふうを考えるんですね。仏教は本質的な我（アートマン）の存在を疑うところから始めた宗教でした。無だということですね。本当の私、本質的な私なんて存在しないんだ。どこにも揺るがない絶対的に、本質的に変わりようのない私なんて存在しないと仏教は説きました。

じゃあ、私とはなんなのかと言った時に、仏教はこう考えます。私というのは、確固たる本質を持った揺るぎない存在ではなくて、私という姿を持ったひとつの現象であると。どういうことかと言うと、例えば、般若心経に「五蘊」というのが出てきます。「色・受・想・行・識」ですね。この5つの要素が結合して、私という姿を作っていると般若心経では説かれています。それぞれの要素が組み合わさって、私というひとつの現象が仮にここに存在している。五蘊の結合だと言うんですね。じゃあ、この色・受・想・行・識という5つの要素は、私という現象をどういうふう構成しているのか。私とあなたは違いますよね。五蘊の組み合わせ方によって、それぞれの個性を持っています。この個性というものは、本質ではなくて、現象だと言う訳です。じゃあ、この五蘊の組み合わせは、どうやって出来たのかというと、仏教最大の観念にここで繋がっていくことになります。「縁起」です。

私がここにあるのは、時間的・空間的な縁によってであり。縁のネットワークの中に私は存在し他者と繋がりながら生きている。これが仏教の非常に重要な観念です。「無」や「縁」という

思想です。

私という人間がここにいるのは、私の父と母が出会わなければ、私という存在はいません。父と母という存在は、どこで生まれているかと言うと、また、じいちゃんとばあちゃんが出会わなければ生きていません。というふうに、我という存在は過去にずっと遡行していき、その過去の様々な組み合わせの奇跡的な一点として私という現象が存在しているはずで

さらにその時間の奇跡と共に、私たちには、空間の奇跡があるんです。私は今日本語で皆さんにお話ししています。そうして、ほとんど、日本語で考えています。一応、私は、インドに3年半生活して、インドの研究をしていたので、ヒンディー語という言語が出来ますが、しかし、ヒンディー語で日常的に考えることはほとんどありません。ましてや私はそんなに英語うまくありませんから、英語で考えることなんてほとんどありません。私は、否応なく日本語で考え、そして、日本語で様々な表現をしています。しかし、私はこの日本語でしゃべることや日本語で思考することを選んだ覚えがありません。私が主体的にこの言語を選んだのではなくて、これは私がここに生み落とされたということによって、必然的についてきた縁、私の選びようのない縁によって、私は今日本語で思考し、日本語で表現をしています。

だから、私という存在は、合理的思考によって何かを選択し、形成されてきたというよりは、膨大な私を選んでないものによって、そして、私の理性を超えた縁の世界によって、私という現象が生み出されているとしか考えようがない訳です。

つまり、私というものの、絶対的な本質ってというのは、仏教においてはないとされる。縁という作用によって私に構成されている。五蘊というものの結合体が私という現象となり、縁の連鎖によって常に変容していく。私はこれに救われました。絶対的な私なんて存在しない。それよりも、縁の世界に私が開かれることによって、私は常に変容していく。

今、皆さんは、私の話を頑張って聞いてくれています。そして、私は皆さんに語りかけています。これは一つの縁ですね。きわめて、奇跡的な縁です。だって、皆さんとこういう場でまったく同じメンバーで時間を共有することなんてもう絶対に二度とないでしょう。皆さん今日もうちょっと寝てたかったと思います。二時間目だから。なのに、この授業に来て、私の話を聴いている。

私は話しながら、そして、皆さんは聞きながら、自己を構成している五蘊が少しずつ変容しているかもしれません。この結合のあり方がすこしでも変わることによって、ちょっと前の自分と今の自分が変わっている。世界が開かれることによって、自己という存在は、変容していく。縁の中に、自分が存在し、そのネットワークの中で、自分がどんどんどんどん変容しながら、生きている。この現象を引き受けること。これが仏教の非常に重要な論理なんだろうと思います。我という本質はありません。私という本質がないが故に、私は世界が開かれている。他者に、開かれています。

もっと言うならば、私というものが無であるからこそ、私の中に世界があり、私の中に他者が

ビルトインされているんです。そうしてその関係性の中で、私という現象はどんどんと変容していく。だから、自分探しがこの瞬間無意味になる訳ですね。だってどこをどう探したって、本当の自分なんていないからです。それよりも、世界や他者に開かれた方が、自分という現象をダイナミックに生きることができます。これが仏教の考え方です。縁という考え方です。だから、「我は無であるがゆえに我が存在する」んです。私という存在の本質がないが故に、私が現象として存在している。「我無し故に我あり」。私は若いとき、これにとっても救われました。

今、無という話をしました。私は絶対的に無です。私の本質なんてものは存在しません。そのことを表現した言葉に、「絶対無」という観念があります。これを言ったのが、近代日本最大の哲学者と言われる、西田幾多郎という人です。西田は面白いことを言いました。彼は、絶対無の後に場所という言葉をつけます。これが今日の最大のポイントになってくるところです。「絶対無の場所」というのが、西田哲学の重要なキーワードです。

### インドの知恵——「ダルマを果たせ」

「絶対無の場所」。徐々に私の言いたいトポスという問題に近付いてきました。これをいきなり説明するとまた観念的になるので、少しだけ、私の経験してきたことを少しお話ししたいと思います。

私は自分のことを仏教徒だと思っています。特にどこの宗派にも属していません。親鸞のことをずっと考えてきたので、私は親鸞に対する非常に近い思いを持っていますけれども、かといって浄土真宗の大谷派や本願寺派に属している訳ではありません。ただ、私は仏教徒だだけ思っています。

しかし、そう思うまでに、私はとても時間がかかりました。私にとって一番わからないものが宗教でした。宗教って意味がわかんないって思っていました。

けれど、20歳くらいの時に、さっき申し上げたようなことがあって、宗教っていったいなんだらうって関心を持ちました。しかし、それは関心にとどまりました。自分がなんかの信仰を持つということは、どうも踏み込めないし、そこには嘘偽りがあるなと思ったんですね。だってわからないからです。しかし、わからないことというのを追及することが、私にとって重要でした。

宗教ってなんなんだらうってずっと考えて、そして大学院にあがって、私はインドに行きました。で、インドのお寺に住み込んで、ヒンドゥー・ナショナリズムといわれるヒンドゥー教の極端な原理主義運動のことを研究していました。ヒンドゥー教徒たちと一緒に生活をして、トータルで3年半くらいインドにいました。

ある日です。街の中を歩いていました。するとスコールの様な雨がざーっと降ってきました。

急に降ってきたんですね。季節外れの雨だったと思うんですが、私は傘も雨合羽も持っていませんでした。あー困ったなって思っていると、ふと手招きをしている人が見えました。誰だったかという、ヒンドゥー教の僧侶でした。

私はとにかく雨宿りをしようと思ってきました。するとそのお坊さんは、ヒンディー語を話す日本人なんて珍しいので、いろいろなことを聞いてきました。「君はなんで日本人なのにヒンディー語を話してるんだ」と。「お前のインドにいる目的は何なんだ」と、こういうことを聞かれる訳ですね。私は「インドの研究をしている」という話をします。そうすると「何の研究しているんだ」って話になります。その時に私は、「ヒンドゥー・ナショナリズムの研究をしている」と答えると、もう一步踏み込んでくる訳ですね。「じゃあお前はヒンドゥー・ナショナリストとのことはどう思っているのか」って聞かれる訳です。お前はヒンドゥー・ナショナリストの味方なのか、それとも批判的なのかってことを聞かれる。で、一生懸命答える訳です。

私がヒンドゥー・ナショナリストに感じたことは、オウム真理教の問題と同じでした。私は彼らの問い自体はわかる。インドももはや消費社会の中にあります。郊外の新興住宅地はショッピングモールだらけです。そして、マンションもどんどん建っていて、隣に住んでいる人が誰なのかも知らない。流動的な社会になっています。そんな中で私とはなんなのかというのがよくわなくなってしまう現代人が、もう一度ヒンドゥー教のあり方をと問い直す宗教復興現象が起きています。そんな中、新興宗教も勃興していますが、その一つの現象がヒンドゥー・ナショナリズムという現象です。彼らは、時に暴力的で、ムスリムやクリスチャンを攻撃します。他宗教に対して極めて攻撃的な側面を持っています。

私は入り口は一緒だと思いました。僕も、オウムに入った青年も、ヒンドゥー・ナショナリストになった若者も、土台部分の悩みは同じだからです。こんな現代社会の中で、消費や享楽に溺れて生きていくのはばかばかしいと私も思いますし、だから宗教とはなんなのかという問いを持ったわけです。だから、入り口はわかるんです。けど、なんで出口で他者に対する暴力をふるったり、排除を伴ったりするのか、このプロセスが私の研究の対象なんですけど、そんな話を僧侶にもしました。

黙ってその僧侶は聞いていました。そして、僧侶は、私にこう言ったんですね。目の前にある木を指さして「この木を見なさい」って言うんですね。突然です。なんなんだろうって思っていると「この木は、夏になると葉を茂らせ、そして、その葉っぱは、二酸化炭素を吸って酸素を出す。もう少し経つと、ここから実が出来てきて、その実を小鳥たちはついばみ、小鳥が運んだ種によって、また新しい生命が誕生していく。さらに、夏のかんかん照りの日には、木陰を作って、人々が涼をとる。そして、君はこの雨に濡れないために、この木の下にいる」って言う。

「けども、この木が、世界のために何かをしようと思ってやっているのか。この木は、みんなのために、世界のために、二酸化炭素を吸って、空気を出そうと思ってやっているのか。みんな

のために、木陰を作ろうと思って、この木は存在しているのか。実を作って、小鳥にお腹いっぱいさせようと思っているのか。思っていない。『世界のためになっている』なんて事を全く思わず、ただこの木は、この場所に存在する。無心で存在している。そして、ここに存在することによって、世界全体の、あるいは、宇宙全体の極めて重要な意味を担いながら、役割を担いながら存在している。世界はすべてが繋がり合い、そして、それぞれがそれぞれの場所において、役割を果たし合っている。そんな場所に、この木は存在しているのだ。だから、この木は、宇宙と一体化している。この木は、宇宙であり、宇宙はこの木に表れている。この木は、まさに、ミクロコスモスであり、宇宙全体のマクロコスモスは、このミクロの中に体現されている。だから、この木は、宇宙であり、宇宙は、この木である。こんな関係性こそが、真の宗教である」と彼は言いました。

彼は私に何が言いたかったかと言うと、「ヒンドゥー・ナショナリストはこの木とは違う」というんですね。「ヒンドゥーの本質を自分たちこそが一元的に所有していると語り、他者を排除していく。そんなものが真の宗教ではない」と彼は言いました。

だから、「この木を見よ」と言ったんですね。「無だ」と。そして、言いました。「君は、この木と同じように、ダルマを果たせ」と。ダルマというのは「法」と訳しますが、しかし、法というのは、皆さんが何か知っている民法や刑法のような実定法ではありません。宇宙全体の法則のようなものですね。このダルマに含まれる重要な要素が、義務という概念です。世界の中で自分が果たすべき役割や義務です。彼が「ダルマを果たせ」と言ったのは、どういうことかと言うと、「あなたは、あなたが生きている自己いうものを引き受け、自己が存在する場所の関係性をしっかり引き受け、その中で、あなたの役割を果たすこと。そして、自分はいいことをしているなんていう思いあがった観念を持たず、そこにおいて、静かに役割を果たし続けること。それが、ひいては、世界全体のために、自己が、世界全体と繋がり、自己の救済に繋がる」ということを言いたかったんだろうと思います。「世界は全て繋がっている。有機体的な存在である」というのが、彼の言ったことでした。そして、その有機体の中には、それぞれの場所が存在する。自分が生きていて意味のある場所がある。

この場所を精一杯引き受け、世界や他者に開かれていくこと、これが、西田幾多郎の言った「絶対無の場所」という問題でした。有機体的な社会の一部を担いながら、なんらかの役割を果たし、生きていくこと。ダルマに包まれ、ダルマを果たすこと。その場所こそが、私の言いたい、トポスという問題です。自分がそこにおいて、重要な役割を果たしている場所です。こんな場所というものが、人間にとっては、おそらく不可欠なんだろうと思います。

そして、このトポスという概念をとっても深く掘り下げ、考えたのが、若き日の牧口常三郎でした。

## 牧口常三郎とトポス

牧口が重要視したのは、郷土という問題でした。ふるさとですね。そして、世界はこのふるさとというマイクロコスモスから、同心円状に成り立っていると彼は考えました。その延長上に、国家というものが存在し、そして、その外円に、世界というものが存在する。世界に生きるということは、郷土に生き、そして、国家の中で生きることだという構造が、牧口常三郎の地理観の中にもありました。

だから、牧口常三郎は、こんなことを言っています。『人生地理学』の最初の方であったと思いますが、「自己の正当にして、着実なる立脚点を、自覚しなければならない」と。

自分が、ここに存在するということの立脚点を自分で見つけないといけない。自覚しないと、彼は言っています。そして、「そこにおいて、自己の正に務むべき職分」、つまり自分がそこで果たすべき役割というものを、自分でしっかりと認識しなければならないと、牧口常三郎は言っています。

だから、重要なのは、郷土に対する観察である。自分がそこにいる場所。これはただ生まれた場所という訳ではありません。自己のトポスですね。これを徹底的に観察する。そして、これを観察することによって、自分はどこに立っているのか。自分を支えている根拠とはいったいなんなのか。私とはなんなのか。これを徹底的に突き詰める。人と場所との関わりを徹底的に追及すること。これが地理学の重要な目的としてある。だから、彼は、単に、地理学を単に人文地理学と言いませんでした。人生地理学というふうに言ったんですね。これが非常に重要なポイントです。だから、自分のトポスというものを空間において発見せよと、牧口は考えた。

そうして、彼はトポスが有機体的なものとして存在するというところを、第20章の社会というところで、丁寧に述べています。有機体という観念が、牧口の中で非常に強くせり出してくるのが、第20章です。彼は例えば、こういうふうには言っています。少し読んでみましょう。

「『社会』と云ふ語によりて表はさるべき以上列举せる大小の団躰を更に通覧するときは、其間に重要な差別ある二部類に区分することを得。」と。「則ち村落、都市、国民等の結合団躰は諸々の個人が漸次に集合し、増大して成りたるものにして真正の社会と云うべきものなれども、学校、演説会、教育社会、交際社会、経済社会等の種々なる団躰にありては、前種の成立とは全く其事情を異にし、前種の社会の成立したる後に於て其社会の成立を確固ならしめんか為に、或は社会の目的を達せんが為の或る手段として発生せるものに過ぎず。されば後種の団躰たるや、前種の真社会の為に、或る確定せる一部の職能を遂げんが為に真社会存立の基礎の上に存在するものにて之を有機躰に対比すれば正に四肢、五官等の諸種の機関に相当すべきものたるなり。」(牧口常三郎全集第2巻196頁)

難しい言葉でしたね。けれども、簡単に言ってしまうと、世界は有機体のように、繋がりが合っている。団体や個人は、脳が脳の役割を果たし、腕が腕の役割を果たし、足が足の役割を果たすことで人体という一つの有機体が成立するように、与えられた場所で役割を果たすことが全体への貢献になる。そして、それは、脳は脳だけで存在できず、腕が腕だけで存在せず、足が足だけ

で存在せず、それぞれがそれぞれの、手は物を掴むという役割を担い、足は真っ直ぐ歩くという役割を担い、脳は考えるという役割を担い合った上で、私という一つの有機体が存在している訳です。人間も世界や宇宙から見ると、そういう存在だと牧口は言いました。腕には腕のトポスがあり、足には足のトポスがあるように、あなたにはあなたのトポスがあると言うんです。

もう少しだけ、読んでみましょう。これも同じようなこと言っているところですね。

「彼の有機体が特殊なる筋肉機関を分化したるが如く、而して各々一定の目的を有し、全軀社会の職能の一部を分担し、相互に依従して生活をなすものなり。」(牧口常三郎全集第2巻197頁)  
徐々にわかってきたと思います。

20章の最後に、「社会は有機体なりや」(牧口常三郎全集第2巻209頁)という節があります。そこで彼はこういうふうにあります。

「各分子、各部分は各々其勞を異にし、互に相助け、相俟ち、相協同して後、始めて全軀も各部分も生活し得るものなり。」(牧口常三郎全集第2巻210頁)

それぞれがそれぞれに、役割を果たし合うことで成立する、相互扶助ですね、相互に関わり合い、助け合うことによって、宇宙全体が成立する。これが牧口常三郎の言いたかった世界の構造でした。そして、その中に、彼は、まだこの時点では極めて萌芽的なものですが、その核心のところに、東洋的な宗教の観念があるだろうと考えています。

明確に言葉として示されたのは、山のことを論じている章です。山岳をなぜ人類は信仰の対象とするのか。なぜそういう普遍現象が起きてくるのか、ということに彼は考えています。太陽についても同じことを彼は考えています。そんな時に、彼はこう述べています。「天を知り、天を返し、天と融合する」、それが人間の宗教というものだ、と。牧口という人は、多一論的な発想というものを強く持っていた人でした。多一論というのとはどういうことかということ、ガンディーはこのことを山に例えます。世界にたくさん宗教がある。仏教もあれば、キリスト教もあれば、イスラームもあれば、ユダヤ教もある。この宗教間の争いが世界中で起きていますよね。キリスト教対イスラーム。あるいは、イスラーム対ユダヤ教。色んな戦いが、世界中で起こっています。それぞれが何を主張するかというと、自分の宗教こそが正しい真理を所有している。自分たちの道こそが真理の正しい教えなんだ。こういうふうな、様々な形で言い合っています。

ガンディーは真理を、山の頂上のようなものだといいました。山の頂上というのは一つですよ。しかし、山頂に至る道は複数あります。色んな道がありますよね。しかし、最終的に行き着く頂点、頂きというのは、一つですね。

ガンディーはこれを、宗教に例えました。イスラームには、イスラームの道がある。仏教には、仏教の道がある。もちろん、日蓮宗には、日蓮宗の。浄土真宗には浄土真宗の。キリスト教にも、ユダヤ教にも、それぞれの道がある。しかし、その道というのは、最終的には、一つの同じ頂きのところに辿り着くんじゃないのか。つまり、ガンディーが言いたかったことは何かと言うと、「真理の唯一性ととも、真理に至る道の複数性を認めよ」ということですね。そうすることによって、相手がイスラーム教徒であろうとも、キリスト教徒であろうとも、究極的には同じ真理

を共有していると考えられる、クリスチャンやイスラーム教徒の中にも、自分が信仰している教えと、同様のものが眠っている。ただ宗教の差異は、真理に至る相対的な道や言語の違いに過ぎないと考えるのが、この多一論的な認識のあり方です。

西田幾多郎は、これを「多と一の絶対矛盾的自己同一」というふうに言いました。現象世界は多様なものとして現われます。しかし、それは、究極的に考えていくと、「一」なるものへと辿り着きます。「一」なるものは、「多」様なものとして現われ、「多」様なものは、「一」なるものへと還元される。この「多」と「一」というものは、絶対的に矛盾しているように見えながら、実は一つのものであります。

これは、西田だけが考えたものではありません。ガンディーは、山の例えで例え、そして、様々なアジアの宗教家たちが、このアジア的な認識論というものを考えてきました。牧口の「天」という概念の中には、そういうような多一論が含まれています。それぞれの土地には、それぞれの道がある。そして、その道は「天」という普遍的真理へと接続していると考えたであろうと私は思います。そして、それぞれのトポスというものを、しっかり引き受け、その中で生きていき、役割を果たしていくことによって、世界全体が一なるものとして、有機的に繋がっていく。そんな認識論を、『人生地理学』の中では、一生懸命、述べようとしたんだろうと思います。もう一か所言及しておこうと思います、これは、第1巻の始めの方ですね。彼はこういうふうには言っています。

「万国の地理に現るる複雑な來現象の概略は、ほぼ是を僻陬の自町村において、是を説明すること、難しからず。既に、一町村の現象にて、郷土の地理を明らかにせんか。よって以て万国の地理を了解する事容易也」

これはマイクロコスモスとマクロコスモスという問題です。私たちが生きている自分のトポスというもの、郷土をしっかりと見つめること。そして、そこにおける構造と自己との関係性を追求することによって、世界全体の構造を知ることが出来るんだ、と。だから、何も、大きなところばかり見る必要はない。自分が立っているその足元を見つめよ。その足元を追求することによって、つまり、このトポスを追求することによって、私たちはマクロコスモスを手に入れることが出来るんだ。世界全体というものを手に入れることが出来るんだ。この構造を、牧口常三郎はこの本の中で、繰り返し、繰り返し、私は述べているんだろうと思います。

私が言いたいのは、このトポスを喪失した社会が今の日本社会なんじゃないのかという点です。日本社会は、このトポスというものを失ったんじゃないのか。

もう一冊、本を持って来ました。私が20歳の時に、大きな影響を受けた思想家に福田恆存という人がいます。私は、この人を通じて、トポスという観念に関して非常に接近していったんですが、福田恆存は『人間・この劇的なもの』という本を書いています。その本の中で彼はこういうふうには言っています。

「個性などというものを信じてはいけない。もしそんなものがあるとすれば、それは自分が演

じたい役割というものにすぎぬ。他は、一切生理的なものだ。右手が長いとか、腰の関節が発展しているとか、鼻が効くとか、そういうことではない。また、ひとはよく自由について語る。そこでもひとびとはまちがっている。私たちが真に求めているものは、自由ではない。私たちが欲するのは、事が起こるべくして起こっているということだ。そして、そのなかに登場して一定の役割をつとめ、なさなければならぬことをしているという実感だ。なにをしてもよく、なんでもできる状態など、私たちは欲してはいない。ある役を演じなければならず、その役を投げれば他に支障が生じ、時間が停滞する——欲しいのは、そういう実感だ。」

私が、ここで生きていること。私がいないと何か停滞したり、うまくまわらないと思う、そう思える実感が、実は人間の本質を支えているんじゃないか。役割を引き受けること。何かから自由になり、裸になっていくことよりも、トポスを引き受け、その中で役割を果たすことによって、自分を見出す。それが、人間の本質なんじゃないかと、福田恆存は言っています。

このトポスを失わせてきた、このトポスを切り刻んできたのが、現代日本の社会なんじゃないかなと思う訳です。例えば、皆さんが直面する就職の問題。非正規雇用という問題があります。非正規雇用や派遣労働というのがなぜ辛いのか。

私は2年ほど前、『秋葉原事件』という本を書きました。秋葉原事件を起こした加藤智大を徹底的に追いかけて、加藤がどうしてあの事件に至ったのかを、追っかけました。加藤は事件を起こす数日前に、こんなことを言っています。彼は、派遣先で自分の作業着がないと言って、暴れて、無断退勤して、自分の下宿に帰って行きました。そこで彼は呟くんですね。「自分なんて本当は必要じゃない。自分の付け替えなんてどこにでもいるのに、誰でも出来る簡単な仕事なのに、こんなもう一回出てこいというふうに会社の人は言うてくる。誰でも出来る仕事なのに、誰が行くか」というふうに言っています。

彼が現実社会から突き付けられたものは、一体なんだったのかということ、代替可能性というものです。「あんたじゃなくなっちゃっていいんだよ」ということですね。「あんたじゃなくなっちゃって、あんたがやめたって、AさんやBさんや名前の知らない誰かが来てくれれば、その仕事簡単に埋まるんだよ」。これが、派遣労働が突き付けてくる、実存を切り崩す問題です。自分が何のために生きているのが、自分が必要とされているのか、自分が意味ある生き方をしているのか、そういったことが現代社会では見えにくくなる訳です。自分が社会の中で果たしている役割、トポスというものが、喪失してくる。

だから、私は派遣労働とか、非正規雇用の問題に対しては、徹底的に抗わなければならないと思いました。これはトポスを崩すからですね。職場に行ったら名前と呼ばれず、派遣さんというふうに呼ばれます。そんな人生が本当にトポスを引き受けた人生になるのか。

原発が奪ったものもこのトポスです。丸ごと、ある半径何キロメートル圏内には住めないという、多くの人の大切な大切なトポスを一気に奪いました。その問題から始めなければ、原発の議論というものは、私は始まらないだろうと思います。放射能の問題。色々な問題がありますが、原発が奪ったものが何かというと、トポスです。これは、とっても重要ですね。ここから、私た

ちがもう一度問いを始めなければ、私たちが3.11以降の日本の中で生きていく道筋を見つけられないのではないかなと思っています。

その時に私は、もう110年前になります、1903年に書かれた牧口常三郎の『人生地理学』は、きわめて重要なメッセージを蓄えているだろうと思っています。1903年という年も、日本が非常に戸惑った年でした。藤村操という一高生が、苦悩の末に華厳滝に飛び込んで、自殺をした、そんな煩悶な時代のスタートでした。そんな時に出した牧口のメッセージは、おそらく現代にも通じるメッセージなんだろうと思っています。

ということで、今日は、「牧口常三郎『人生地理学』とトポスの問題」というテーマでお話をしました。以上で、終わります。大変にありがとうございました。